

恭仁宮

よみがえる古代の都

今からおよそ1300年前
木津川市に都が造られ
歴史の中心舞台となりました。



恭仁宮跡が立地する熊原地区は、京都府最南端に位置する木津川市加茂町にあります。熊原地区は、平城宮跡の北方に位置し、三方を急峻な山で囲まれ、南に木津川が流れる盆地となっています。恭仁宮は南に広がる自然地形を利用して造営されました。

恭仁宮跡周辺には重要な寺院や古代の造幣所跡などが立地し、かつてこの一帯が古代の中核地域であった痕跡が明らかになってきました。かつて「万葉集」にも詠われた恭仁宮の地はのどかな農村として受け継がれ、秋には一面のコスモスが人々を惹きつけてくれます。

地下に眠る往時の遺構は、地域の人々により今まで守り伝えられてきました。熊原に現も残る大極殿の基壇と山城国分寺の塔跡の巨大な礎石が往時を偲ばせています。

天平12年(740)、聖武天皇は、疫病や戦乱に見舞われ、社会不安が全国的に高まっていた事態を一新するため、平城京からの遷都を決定し、山背国相楽郡恭仁郡を新しい国と定め遷都しました。

恭仁宮は、それまでの都に比べ規模も小さく、わずか5年あまりの短命な都でしたが、この間、諸国に国分寺・国分尼寺建立を命じたり、聖徳太子私財法など重要な政策を行い、日本の中心としてその役割を果たしました。また、この時期に大仏造営にも取り掛かっています。



熊原地区(木津川上流から西を望む)

恭仁宮の規模は、東西約560m、南北約750mの長方形で、面積約42haであったことが確認されています。

恭仁宮は、宮の中心地区である「大極殿院地区」、その背後の東西に並んだ2つの「内裏地区」、大極殿院地区の南側の「朝堂院」、「朝集殿院」によって構成されていました。また、宮の周囲には「大垣」と呼ばれる堀によって囲まれており、南東部には「東面南門」がありました。

恭仁京の範囲については不明な点も多ありますが、恭仁宮のほぼ正面を木津川を隔てて南北に連なる鹿野山(大野山)の東側(加茂地区)を左京、西側(木津・山城地区)を右京とする説が有力です。

710年(和銅3年)	平城京に都が遷都される
724年(神亀元年)	聖武天皇が即位する
740年(天平12年)	九州で藤原広朝が反乱をおこす 恭仁宮に遷都される
741年(天平13年)	天皇、恭仁朝を朝賀を行う 国分寺・国分尼寺造営の詔が出される
743年(天平15年)	大仏造営が決定される
745年(天平17年)	恭仁宮から難波宮に遷都される 再び平城京に遷都される
746年(天平18年)	恭仁宮大極殿を国分寺に施入する
752年(天平宝字4年)	東大寺大仏開眼供養
784年(延暦3年)	長岡京に遷都される
794年(延暦13年)	平安京に遷都される



◆大極殿院

恭仁宮の中心地区である大極殿院地区は広い前庭をともし、前庭から1段高い位置に大極殿が建てられていました。大極殿は、天皇を中心とした儀式や政治を行ううえで最も重要な建物でした。現在でも、東西約60m、南北約30m、高さ約1mを測る土壇が残っており、これが大極殿の基壇と推定されています。発掘調査により13箇所の礎石露出痕跡や基壇の一部、正面中央階段等が発掘されました。これらの調査や文献によって恭仁宮の大極殿建物は、第一次平城宮の大極殿を移築したものであることが明らかになりました。平成22年(2010)に平城宮大極殿跡に復元された大極殿建物は、恭仁宮跡の発掘調査結果をもとに建築されました。



恭仁宮跡 CG 復元図



平城宮跡に復元された、第一次大極殿(平成22年1300年創10/5)

◆内裏

大極殿地区の背後には、東西に並んだ2つの区画の内裏地区がありました。天皇が日常生活を送るところで、時には政治を行い、臣下を招き宴会なども開かれました。

◆朝堂院・朝集殿院

大極殿地区南側には朝堂院がありました。朝堂院というのは、役人たちが夜明けから昼頃までここで仕事をしていたことが由来となっています。正月の朝賀や外国使節が訪れたときには、役人たちが朝堂院の広場に並び、儀式を行いました。発掘調査により、南側を独立柱で囲まれていたことがわかっています。朝堂院の南は朝集殿院となっており、朝堂院で行われる儀式が始まるまで役人が待機する場所であったと考えられています。

◆大垣・東面南門

宮の周囲は、大垣と呼ばれる、高さ5mにもおよぶ大規模な土壇で囲まれていました。版築により構成された基壇と、雨落溝が発掘されました。大垣の四面には、出入りするための宮城門がつくられ、警備兵により厳重に守られていました。発掘調査により、東面南門は礎石建の八脚門であることが判明しました。



恭仁宮大極殿跡



山城国分寺塔跡

◆山城国分寺の誕生

天平17年(745)、恭仁宮から難波に都が遷されると、翌天平18年(746)、宮跡の中心部分は、当時全国的に進められていた国分寺建立の動きに合わせて、「山背国分寺」として生まれ変わることにしました。国分寺は東西約275m、南北約330mという広い面積を誇っていました。かつての大極殿は金堂として再利用され、新たに七重塔が造営されました。こうして完成した山城国分寺も鎌倉時代以降には勢力が衰え、寺の規模も徐々に縮小していったと考えられます。現在も七重塔跡は、土壇の上に15個の巨大な礎石が残っています。

平成22年3月木津川市教育委員会発行「恭仁宮」より一部引用しています。